

# 多摩 CB 物語

## ～竹内バージョン～

世話人 竹内千寿恵

### 目次

目次 .....	1
1 冒険の始まり .....	2
2 ソーシャルキャピタルを目の当たりに CB の世界へ.....	11
3 ソーシャルラブリーさんたちとの出会い .....	13
4 シンポジウム分科会 ソーシャルキャピタル Café 笑顔の奥の涙.....	16
5 結界を乗り越えてくる人 .....	18

## 1 冒険の始まり

### ○賽は投げられた♪

ある日、夫が帰宅するなり言った。「仕事やめようと思う」

(!?シゴトヲヤメル、そっか、やめちゃうんだ…って、ちょっと待ってよー！)

だって、私は専業主婦よ、おまけに子ども二人まだ小さいんだからねー、と一通り思いつくことを並べ立てたけど、心の中では（しょうがないよね、嫌なんだったら）と認めてしまっていた。

もともと変化は好きなのだ。この不況下、待っているのは「いばらの道」かもしれないけど、うじうじしてるよりは、ちょっと勝負してみるのもいいかも。

ということで、あっさり夫の退職は決まってしまった。妙に清々しく心うきうきの夜だった。

(未来に待ってたのはほんとに「いばらの道」だったんだけど、この夜の我が家は、そんなこと知る由もない。)

夫の退職が決まって、にわかに頭をもたげてきた考えがあった。そう、お仕事を始める！

社会復帰だ！！

結婚以来、2～3年ごとに転勤を繰り返し、行った先々で二人の子を生み、仕事をすることなんて、思いもよらなかった。

昔の友人たちのほとんどは、大学卒業後ずっと仕事を続けている中、専業主婦は少数派。同窓会のたびになんとなく取り残された気分で、内心（このまま年取っていくのは嫌ダ～～！）と思いつづけていたのだ。

そんな中の夫の退職。これは私にも働きなさいってことよね。むくむくと勤労意欲が湧きあがってくる。劇画調に描写すると、ひとみに炎が燃え盛っていたにちがいない。

サクセスストーリーを思い描いて、夢は広がる。（夢見るのはタダだし。）

思いつくとすぐ行動しないと気がすまないのは、持って生まれた性格。翌日から、さっそく就職活動に走ることを誓って、心地よく眠った。

## 〇はじめの一步

さて、思いついたらすぐ行動したくなる。

あれこれ考えるより、動きながら展開を見つつ進路を決めるのが好きだ。

「こっちはこう動いたけど、さあ次はどんな手でくるかなー」というわくわく感があるから。

というわけで、求人情報の収集に走ったが「えっ？」というくらいお仕事情報が少ない。

穏やかで住みやすい、お気に入りの町だったけど、お仕事がない。

都市部では、新聞の日曜版折込に求人広告のチラシがどさっと入ってくるけれど、そもそも求人チラシなんて見たことない。で、あらためて周りの人たちの状況を見ると、じつはみんな内職が中心だった。そういえば、子どもの学校の参観とかいくと、おすすめ内職の情報交換がさかんだった。近所の奥さんたちにリサーチすると、あの人もこの人も、という感じで、みんなじつは内職していることがわかった。

## **外に働きに行く場合、もっとも割がいい仕事は人参の出荷手伝い！**

時給もよく、これはいいかも！と思った。お隣の奥さんは、お菓子作りが趣味というほんとに主婦の鏡のような素敵な人だったが、農繁期には長靴を履き人参畑に通っていた。

そして、農道をサングラスをかけジーンズ姿でさっそうとトラクターを走らせている、別の奥さんにも出会った。『そうか、ここのアルバイトの王道は農業だ！』ということに気づいた私は、さっそく就職活動に走ったが、なんと競争率が高くて、なかなか職にありつけない。

頼みの綱の雑誌の付録のセット組みの内職も5人待ちと言われてしまった。

お仕事探しは、思ったより大変かも～～。

へこみ気分の私の目に、ある日、町の広報の片隅の臨時職員登録のお知らせという一文が飛び込んだ。登録しておく、運がよければお仕事をさせてもらえるらしい。

## **よっしゃ～～！これだ！！**

農業も内職も断られた私は、ダメもとで登録してみることにした。（登録するだけならタダだし！）

さっそく履歴書を買ってきた。写真が大切よね！ということで、インスタントではなく、張りこんで写真屋さんでバッチリ写してもらった。

この時点で、就職活動してることは夫には内緒。夫が出張で留守の夜、思いのたけを込めて履歴書記入。

一筆入魂って感じよね。そして明日決行！を決めた。決行といっても、ただ町役場の受付まで履歴書持っていただけなんだけど…。

翌日、いざ出陣の気持ちで町役場まで下の子の手を引き出向く。

小さな町のわりにはりっぱな庁舎の役場で、提出先の総務を探してうろうろする。1Fの住民課くらいしか用がないのだもの。総務は3F一番奥、未知の世界だ。

恐る恐る、カウンターに一番近い席の男の人に声をかけた。

「臨時職員に登録したいんですけど」

職員さんは、私の履歴書を受け取って、軽く目を通すと、次の瞬間、思わず耳を疑うような言葉を発したのだ。

「来週からの仕事があるんですけど、来れますか？」

『うっそー！いきなりお仕事ゲットなの～～?!』

内容や条件を聞く前に、ほとんど条件反射的に「大丈夫です！」と言い切ってしまった。お仕事は2ヶ月の短期、週5日の8時30分から5時まで。仕事内容は交通傷害保険の受け付け。条件を述べる職員さんの声は天使の囁きのような音だった。

が、ここで現実に戻された。そう、この足元にしがみついている3歳児をどうしよう。核家族で近所に頼める知り合いもいない。数秒間のうちに、いまだかつてない速さで頭が回転した（ような気がした）。

『こうなったら、町の保育園に直談判だ!』

職員さんには「子どもの預け先を確認してきます。すぐ戻りますから、待っていてください！」と言い残し、子どもの手を引き、庁舎に隣接する保育園に走った。週1回、体験入園で通っているのだから、まったく初めての園というわけではないけれど、毎日預けるにはいろいろ手続きがあるし、定員もからんで難しいという話だった。

園はちょうどお昼寝の時間で、静かだった。先生に駆け寄ると、事情を話し、2ヶ月だけだからと嘆願。はじめは渋っていた園も、私の様子から鬼気迫る(?)ものを感じたのか、OKしてくれた。

「ともくんなら、大丈夫だね」という、うれしいお言葉。

『息子よ！日頃いい子だったから、こんな時、救いの手が伸びるんだよ！』思わず子どもの頭をなでなでした。

役場に引き返した私は、「子どもの預け先は確保できました」と平然と報告し、足取りも軽く、子どもと二人スキップしながら帰路についた。ちょっと、あぶない人だったかもしれない。

噂ではなかなか採用してもらえない役場の仕事に、即採用なんて、もしかして私、オーラが出てくるの〜？好感度ナンバーワンかも〜！といい気になっていたが、後日談で、この職員さんから裏事情を聞いた。

じつは、決まっていた人から辞退の連絡が入った直後だったらしい。あせっていたので、よほどひどくない限り誰でも良かったとか。

**運も実力のうちよ！**

こうして、私の社会復帰の扉は「百年の眠りから覚めて」（…10年だよ！）外の世界に大きく開かれたのでした！

久々のお仕事前夜、鏡の前で『あーでもない、こーでもない』とファッションショーを開いた。10年ぶりの出勤。当然、かつての服は合わない（デザインも、…そして、サイズも^^;）

子育てにどっぷりついていた間の私のファッションポリシーは「楽！洗濯に強い！」だったため、落ち着くところはジャージ、ゴムウエストのスカート、トレーナー（子供の喜ぶ変なイラスト入り）…。

いくら、役場勤務でそれほど服装に気を使わなくてもいいとはいえ、これではアンマリだ。手持ちの服をひっくり返しながらか、着替えては子供に感想を聞く。何を着ても「おかあさん、可愛い！」と言う子供たちが健気だった。

『…お母さん、頑張るからね！』

翌朝、めったに使わないスカーフに、年に数回しか履かないパンプス、そしていつもよりちょっと濃い口紅で完全武装した私は、他の職員さんの波に紛れて、職員通用口からさっそうと出勤。タイムカードを押した。ガシャっという音に、戦闘開始という感じだ。

仕事内容は、交通障害保険の受付事務。そういえば、少し前の町の広報に案内が載っていた。安い掛け金で、交通事故の治療費用を補償するというものだ。たしか学校でも案内があったから、先日申し込んだはず。

受付は2名で行う。相棒を務めてくれるのは、きりっとした眼差しが印象的な新婚2年目のAさん。昨年も、臨時職員として、この受付を担当したらしい。

総務の横のやたら広い通路に机を並べて、申し込みを訪れる人を待つ。申し込み用紙のチェック、金銭の授受、保険証書の作成…などなど。家計簿もまともにつけていな

い私の頭は、久々にフル回転した。やりながら、とても自分が生き生きしてくるのを感じた。

『ああ、私ってお仕事好きなんだ。』 そう思った。

申し込みに訪れる人は、高齢の方が多い。受取人は特に指定しなければ法定相続人になるが、中には何人かいる子供さんの中で、どうしてもこの子だけにしたい、という人も少なくない。いろいろ複雑な人生模様をかいまみながら、単なる受付というよりお年よりの話し相手、という感じになることもあった。時間に余裕があるときはなるべく耳を傾けるようにした。郷里に残した両親のことなどを思い出しながら。

このことは、後のお仕事の助走にもなった。当時は想像もしていなかったけれど、私はその後パソコンのインストラクターのお仕事をすることになる。生徒さんには高齢の方が多く、根気も必要。でも決していやではない。むしろ喜びがある。根本に、日頃あまり親孝行できない両親のことがあるからかもしれない。

仕事をやりながら、常にある考えが頭にあった。以前、好きだった女優さんがインタビューに答えていた言葉…

「ひとつの役をこなすとき、どんな役だとしてもいつも思うのは、これに失敗したらもう後がないんだ、ということ。それくらいの気持ちで舞台に取り組みます」

ほんとに、たった2ヶ月の短期のお仕事だったけれど、今後につなげるため私は真剣だった。今後も仕事をゲットするためには、毎日が面接のようなものだ。でも、逆に考えれば、毎日アピールできるチャンスを与えてもらっているようなものとも言える。

これを生かさない手はない。仕事も楽しく、社会復帰の決意も固まった。

こうして、私の10年ぶりのお仕事は2ヶ月の日々を経て終わった。最終日には職員さんたちがケーキとコーヒーでお別れ会を開いてくれた。



ちなみに、仕事をすると言う報告を聞いての夫の反応はというと……とても喜んでいました！？

世間には、妻が働くことに難色を示す夫が結構いるという話を聞くが、我が家の場合はそんな心配は皆無だった。そもそも、夫のいうことをおとなしく聞く慎み深い妻というのは、私のキャラからは程遠い。そんな私を妻に選ぶような人だから、夫は妻が仕事をするのは大歓迎というタイプ。

考えてみれば、経済的負担が自分ひとりの肩にかかっているというのは、かなりキツイ。二人で分担すれば、オーバーワークしなくても、家計は維持できる。その分、自分の好きなことにも時間を使えるだろうし、家族で過ごす時間も増えるだろう。私としても、〇〇さんの奥さん、とか△△ちゃんのお母さんではない、私という人を認めてくれて、なおかつ収入を得られる生き方のほうがよっぽど自分らしくていい。

息子たちにも教育しよう。結婚するなら精神的にも経済的にも自立した人を選びなさいね。なおかつ心根の優しい人なら人生勝ったも同然！（ただし、あなたたちも同様に自立することが前提よ！）

この時の思いは、20年後、見事、現実のものとなったが、それは別のお話し。

## ○煙が目に染みる

「お仕事をめぐる冒険」はもちろん陽のあたる場所で、元気印で過ぎていく訳ではない。光と影は表裏一体だ。

夫が仕事を変わるとき、私たちの前には二つの選択肢があった。ひとつは夫の専門の仕事に就くため都会に出ること。そしてもう一つは、A町に留まり子どもたちのために「故郷」と呼べる場所をつくること。

転勤ばかりで、子どもに度重なる転校を強いてきた私たちは、後者を選んだ。でも、それは夫にとっては辛い選択になった。

自然が豊かで、のんびりとした風土。私たち家族は愛着をもって、ここに根をはろうとした。ただ産業に乏しく、働く場は限られていた。夫は、まったく未経験の職に就いた。それは、彼のプライドも、経験も、大切に築いてきたものが否定される毎日だったろう。明るくふるまいながらも、少しずつ疲弊していくのがわかった。

経済的にも厳しかった。高熱で苦しむ子どもを、病院に連れて行ってやれない時もあった。私自身が、体をこわし入院した時、核家族で誰にも頼ることが出来なかった私は、まだ幼い下の子を連れて、大部屋のベッドに横たわりながら世話をした。3年生だった上の子は、夜、夫が戻るまでたった一人。下校すると、私と弟のいる病室に通ってきた。そんな入院が長続きするはずもない。ついには、退院の許可もないまま無理に家に帰った。

秋が来て、私は誕生日を迎えた。

その日、私は下の子を連れて近くの銀行に行った。なにかあったときのためにカードをつくりたかったのだ。窓口の行員さんは、ふっくらとした笑顔の優しい女性だった。年収・職歴・財産…、もろもろの条件を尋ねた後、困ったように言った。

「申し訳ないのですが、この条件ではおつくりできません。」

ついこの間まで、頼まないのに作って欲しいといわれていたカードだった。でも、これが現実…。(この行員さんとは、この後、とつても意外な場所で再会する。でも、それはまた別のお話。)

帰り道、心細げに見上げる子どもの手をぎゅっと握って、歩いて帰った。一步進む毎に、ふつふつと闘志が湧いてきた。

『もう二度と、子どもにこんな心細げな顔はさせない!』

帰宅すると、秋の日はもう傾きかけていた。庭の洗濯物を取り入れる背中では、子どもたちがなにやら笑いながらじゃれあっている。この笑顔を決して曇らせはしない。なす術も無く、うろたえるだけの自分とは今日を限りにサヨナラだ。今日の日を、い

つか笑い話にしてみせる。そんなことを思いながら、お日様のにおいがいっぱい洗濯物を抱きしめた。

裏庭から続く稲刈り後の田んぼから、焚き火の煙が高い空に吸い込まれていく。

ハッピーバースデー… 『嗚呼、野焼きの煙が目にしみる^\_^;』

時を同じくして、夫が再び転職宣言！しかも、今度はついに東京へ行くという。夫が望まぬ職種に悶々としてることはわかっていた。基本的に、私は無理は続かないという考えだ。なので、夫の結論に異存はなかった。子どもたちはまた転校だけど、お父さんのシアワセのため、もう一頑張りしよう！お母さんもできるだけ支えるから、ねっ？

この選択が、第二の冒険の幕開けになり、私は起業し、やがて多摩 CB 立ち上げにかかわるなどということ、まだ、この頃の我が家は想像すらしていなかった。

## 2 ソーシャルキャピタルを目の当たりに CB の世界へ

意気揚々と一家で東京に落ち着いた我が家。夫は都心に得た職場に通い始めた。

子どもたちも小学校、保育園とそれぞれの日常が始まった。

残る私かというと、じつは、長男の学級崩壊という現実と向き合うことになった。それでなくても

転校生、そして小学校5年という思春期の入り口という難しい時期にあって、傍観者ではいられなかった私は、新参者であるにも関わらず、PTA 役員に手を挙げた。

このことが、その後の、NPO 法人の立上げ、ひいては多摩 CB ネットワークにつながることになる。

PTA 本部役員として汗をかいていた頃に出会ったのが、現在もマイスタイル副代表としてともに活動している篠原麻里さんだ。

篠原さんはPTA 代表。じつは、篠原さんのお子さんは不登校。お子さんは学校に通わないのに、毎日のように学校に通い、学校運営のために奮闘する篠原さん。さらに、篠原さん自身、人知れず病と闘っていた。

そんな彼女のまわりには、温かな人の輪がいつもあった。そして、私は気づいたのだ。

多くのPTA 仲間のお母さんたちが、学校に通えない篠原さんのお子さんのことを見守っている。放課後には、篠原家に同級生の友人が集まって楽しく遊んでいる光景もあった。

これが、母親である篠原さんも学校に背を向けていたらどうだっただろう。たった一人、わが子を守る孤独さに、押しつぶされるような思いになったかもしれない。

我が子のことが気がかりでないはずはない篠原さんだったと思うけれど、彼女は、自分の子もよその子も、大きな懐で守っていた。

その思いにこたえるように、多くの母親仲間が篠原さんのお子さんを気遣い見守っていた。

この不思議な現実を目の当たりにして、そのことが私の生涯追いかけるテーマにもなった。

### **ソーシャルキャピタル。人と人之间にある、見えない資産。**

篠原さんのお子さんは学校にはなじめなかったかもしれないけど、友人はたくさんいた。その関係性の中で、子ども時代を豊かに過ごした。そのきっかけとなったのは、母親である篠原さんの地域の子どもたちへの分け隔てない献身にあった。

篠原さんの大きな愛情が育てたソーシャルキャピタルによって、篠原さんの子どもさんには地域ぐるみの愛情が降り注いだのだ。

私はこの出来事を忘れることができなかった。このことをソーシャルキャピタルと呼ぶのだと知った頃、縁あって、NPOの世界に足を踏み入れた。

NPO 法人コミュニティビジネスサポートセンター事務局として働き始めたのだ。

仕事をしたいという気持ちはずっとあった。けれど、仕事であればなんでもよいとも思えなかった。

小さな力かもしれないけれど、その仕事が何らかの形で社会に貢献できるような仕事。

そのテーマで職を探すうちに NPO の世界にたどりつき、さらに、地域の課題解決というテーマにも出会った。その結果として NPO 法人コミュニティビジネスサポートセンター職員への道だった。

ただし、職場は都心の千代田区。家族が暮らす多摩地域からは遠かった。暮らすまちで望む仕事に出会えなかった私は、やがて「なければ創ろう」と決めた。

なので、コミュニティビジネスサポートセンターでは3年半の集中した修業時代だった。寝ても覚めてもコミュニティビジネス。仕事はもちろん、電車の活き帰りには本を読みふけり、休日にはセミナーに通った。3年半たったころ、目標としていた10,000時間、コミュニティビジネスに費やし、篠原さんはじめPTA仲間とともに暮らすまちに立ち上げたのがNPO法人マイスタイル。

ここからさらに冒険は続き、多摩CBへとつながっていく。

### 3 ソーシャルラブラリーさんたちとの出会い

さて、NPO 法人マイスタイルを立ち上げたばかりの頃、コミュニティビジネスの世界で、私はその後の私の運命に大きく影響する二人の「ラブリー」なおじさんに出会った。

地域活動の世界に身を置いたときに、真っ先に気づいたのは「不機嫌なおじさん」たち。

長年、勤め上げ、それなりのポジションで活躍していた自分は、もっと尊厳をもって、遇されるべきだと思っているのか、場の空気を凍り付かせる意見をしかめっ面で語る「不機嫌なおじさん」に出会う経験を積み重ね、その残念さに肩を落としたものだった。

そんなとき出会った、ご機嫌でラブリーなおじさん二人は、種明かしをすると、多摩CB 立ち上げのときのパートナーになってくださった方たち。

お一人は、三鷹でシニア SOHO の先駆けとなった NPO を立ち上げて、事業規模を億単位にしたところで、代表をみずから交代し、次の冒険に旅立とうとしていた堀池さん。

もうお一人は、私より年下だから、おじさん呼ばわりにはクレームが来そうだけど、多摩でなにか新しいことを始めたいなら、まず、この人とつながるべきと、竹内センサーがビビッと反応した、多摩信用金庫の長島さん。

お二人の共通点は、「ラブリー」であること。つまりは、おばさんたちの人気者だったのだ。

型にはまらず、歯に衣着せず、ストレートに語る語り口は、ある意味天真爛漫。それでいて、事業の立上げ、運営は「やりて」。これは、おばさん心をくすぐるでしょう。

おばさんを味方につけると地域では強い！

ということで、ちょうど、多摩エリア初の「コミュニティビジネスシンポジウム」を企画しようとしていた私は「見つけた！」と思って、さっそくお二人にお声がけしたのだった。

なぜ、私がそういう企画をしていたのかというと、マイスタイルを立ち上げたばかりの私であるにも関わらず、いろいろご縁がつながって、広域関東圏コミュニティビジネス推進協議会という団体で、関東経済産業局と連携しながら、幹事の一人として、コミュニティビジネスの活性化に動いていたからだ。

多摩に暮らしているということで、シンポジウム担当になり、企画も任された。

ということで、さっそくお二人とともに、シンポジウムの実現に向けて動き始めたわけである。

そのプロセスは、喧々諤々、議論百出で、たいへん刺激的で楽しいものだった。

どんどん広報するうちに、参加申し込みも順調。まだコミュニティビジネスという言葉自体が市民権を得ていなかった 2009 年当時だったが、100 名を超える申し込みが舞い込んだ。

そんな中、思ったこと。

「やりっぱなしのシンポジウムはつまらない」！

当日だけ盛り上がり、「よかった、よかった」で終わって、いつしか忘れ去られてしまう。そんなシンポジウムは辞めよう！

誰からともなく言い始めたことだったが、すぐに妙案が浮かんだわけではなかった。

まずは、つながりが切れないようにしようということから、当日、アンケートに ML への参加を呼びかけ、希望者には、登録メールアドレスを書いてもらった。

結果、100 名の参加者の中から、40 名が ML 参加を希望した。

多摩 CB の萌芽だった。

互いに、始めました同士が多かったメンバーによる ML が立ち上がり、交流が始まった。

共通点は、多摩が好き、コミュニティビジネスに関心がある、なんだかおもしろそうなことが始まったから仲間になろう。肩書、年齢、性別にこだわらない。過去がどうだったかよりも、今なにがしたいか、未来をどう作りたいたかに興味がある。

ということで、ソーシャルラブラリーな、おじさん、おばさんたちが（おにいさん、おねえさんも）40 名集まった。

多摩 CB のはじまり、はじまり。

#### 4 シンポジウム分科会 ソーシャルキャピタル Café 笑顔の奥の涙

2011年2月の最後の1週間は、ジェットコースターのようでした。

終わった今、まだこの1週間のことがほんとうだったのか、実感がありません。

昨日の多摩 CB シンポジウム、そしてその2日前の広域関東圏 CB 推進協議会の CB シンポジウム。いずれも主催側としてラストスパートと、当日一日がかりの運営。

それに加えて、いくつかのイベント。

4人のインターンの方たちの受け入れ。

さまざまな事務作業。

主婦としての家事。

この年、多摩 CB では、シンポジウムに先駆けて、公募式の CB 分科会を多摩エリア各地から募り、実施していました。

私は、多摩 CB 世話人であると同時に、現場では NPO 法人マイスタイルの代表。公募の分科会に手を挙げて、ずっと温めていたテーマ「ソーシャルキャピタルと CB」をテーマに「ソーシャルキャピタル Café」を開催しました。

多摩 CB シンポジウムの当日は、各地で開催された CB 分科会を互いに共有するプレゼン発表が行われました。

マイスタイルでは、多摩 CB シンポジウムの分科会の一環として開催したソーシャルキャピタル Cafe のプレゼン発表のための動画作り。



ソーシャルキャピタル Cafe の動画作りは、他の業務に手一杯で、取り掛かれたのは前日の夜 11 時半。もうすぐ日付が変わる頃でした。

やりはじめると没頭してそのまま徹夜。朝の 7 時に完成し、そのまま準備して多摩 CB シンポジウムの会場にかけつけて準備、第二部司会を担当し、夜の打ち上げまで。

徹夜で仕上げた私の様子を見て、朝早く起きてきた家族が

「こんなに気持ちのこもった仕事は、普通に仕事という気持ちだけではできないね。」と言ってくれたことがうれしかったです。

日頃、忙しさに追われて、じゅうぶん、家庭のことができていないのに、やりたいことを自由にさせてくれる家族に感謝です。

いまは、久し振りにのんびりした日曜日。

心地よい達成感と余韻の中で、振り返る時間です。

ソーシャルキャピタル Cafe の動画は、直前の夜中に作ったものでしたが、自分と言うのもおかしいですけど、もう一度見て、涙が出そうになりました。

いま、活動している中で、なにも問題がなければソーシャルキャピタル Cafe は開催しなかったと思います。

その背景には、日頃感じているソーシャルキャピタルの希薄さ、つながれない悲しみがありました。

同じまちに住み、おなじようにまちを愛しているのに、わかりあえない。

そんな悲しい気持ちがソーシャルキャピタル Cafe をやりたい気持ちにつながって、大切な仲間との出会いがあって、実現しました。

参加者のおひとりがブログで感想を書いてくれました。

『最後、とてもあたたかい空気につつまれて幸せだった。同時に、みんなの笑顔の奥の涙も感じた』と。

ほんとにそうだと思います。

この涙を笑顔に変えるために、頑張りたいです。

## 5 結界を乗り越えてくる人

多摩 CB の 2009 年立上げ時は 3 名の世話人でスタートした。

発足時は、互いに面識がある程度のゆるやかなつながりであり、日頃は、異なる立場で活動している 3 名であったが、CB 活性化を志向し多摩地域への愛着をもつという共通の思いを持っていたことから、ネットワーク発足のきっかけとなった第 1 回多摩 CB シンポジウムの運営で交流が深まる中、自然に多摩 CB ネットワークの構想が生まれた。

注目される点は、3 名が、特別に取引関係などの利害関係のないフラットな関係性のなかで共通な思いでつながってスタートしたネットワークだったということと、3 名ともそれぞれ重なる部分の少ない自身のネットワークをもっていたということである。

バートのすきま構造理論どおり「つながりのある人々の間に存在する関係が少なければネットワークはオープンでさらに外に広がっていく」という展開を実現できる 3 人が発起人であったことが、その後の多摩 CB ネットワークのひろがりの一因だったと思われる。

口さがない人からは「3つのありじごくに巻き込まれちゃった」とも言われた(笑)

いずれも他に本業を持ち、手弁当での参加であるが、その活動への参加は投資となり豊かなソーシャルキャピタルを生み、そこが活動のモチベーションにもつながっていると思われる。

多摩CBネットワークへの参加条件は「多摩のCB」に関心をもっていること、というシンプルなものであり、これが唯一の結界。簡単すぎて、逆に難しいかもしれない。というのは、主体的に関わらなければ、だれもお世話してくれない放任ネットワークだから。一方で、自ら積極的に関わると豊かな実りを得ることもできる。

構成メンバーは、個人、NPO、行政、企業、経済団体、金融機関など、多彩なセクターから成り立っている。

ゆるやかなネットワークということもあり、それぞれの立場があつたとしても、職務からの義務感で参加というよりも、自身の自発的な意思によって個人的に参加しているメンバーが多い。

初期の頃のメンバー資格は、メーリングリストに参加することのみというシンプルなもので参加規約や会費はない。

参加方法は、フォームからメーリングリストへの参加申込み後、管理人による承認を経て参加となる。活動内容は、メーリングリストを中心に交流し、2ヶ月に一度程度、不定期にオフ会を開催し交流している。

メーリングリストやオフ会をとおして知り合ったメンバー同士は、その後、さまざまに自発的な交流が生まれ、そこから新たなプロジェクトが始まるケースもみられる。

そういう点からは、多摩地域のCBインキュベーションネットワークであるといえる。

「CBに関心があればどなたでも」というスタンスである多摩CBネットワークの参加者は、多彩である。CB起業という観点からはまだ活動を始めていない個人から、すでにCB事業者として起業しているメンバー、これから起業しようと準備中のメンバーなど多様なステージであるが、それぞれはっきりしたビジョンを持ち、活発に人脈を広げているメンバーが多い。

単なる異業種交流会や親睦会ではなく、CBという明確なビジョンを掲げたネットワークであることから、参加者のタイプとしては、参加目的がはっきりしている場合が多い。

各メンバーは、それぞれ多摩エリア各地にホームタウンがある。地元ですでにコミュニティを持ち、団体の代表をつとめるメンバーも多い。

また、行政、金融機関、CB中間支援活動などのメンバーは、幅広いネットワークを個々にもっている。さらにそれらネットワークは重なりが少ないため、あらたに互いのネットワークをひろげあう可能性がある。

こうしたメンバーは団体と団体、個人と個人をつなぐコネクターとしての役割を果たしうる資質をもっており、それらメンバーが集まることで、ネットワークは加速をもつて広がっている。

多摩CBネットワークが生まれる以前には、参加者は個々のホームタウンで個別に活動を展開していた。その活動の中では、同様なハードルに向き合っていたかもしれない。

それがネットワークに加わることで、互いの悩みが見える化する。Aの地域の悩みの解決は、Bの地域で経験したことから得られるかもしれない。互いの経験とノウハウを共有化して活かしあうことが可能になってくる。

またCB活性化につながるさまざまな活動を互いに知ることによって、同様な取組みがスタートする場合もある。よい意味で「ぱくりあう」場ともなっている。

こうした積み重ねの結果、多摩全体のCB活性化の底上げが実現する創発的ネットワークとなっている。

たとえば、ネットワークに集うメンバーは、共通のフィールドを訪問した旅人のようなものである。そこで集合知という風をまとい、ホームタウンに戻りそこで具現化する。そしてホームタウンで得られた成果と経験の風をまとい多摩 CB ネットワークという共通のフィールドに再び訪れて披露する。その繰り返しの中で、多摩全体の CB の底上げがはかられている。